教育の力とは、そういうものだ

長野県 比田井美恵

(注…今回、戦争に関するテーマで書かせていただきました。わたしの知識不足、配慮不足から、もしかしたら、不適當な表現があるかもしれませんが、ご容赦いただきますようお願いいたします)

私の学校の入学式では、毎年、(株)S・Yワークスの佐藤芳直氏をお呼びし、特別講演会を行っています。今年はその七回目。毎年感動の講演をしてくださるのですが、今年は特に涙が止まりませんでした。芳直さんは、知覧特攻隊の話をしてくださったのです。

…昭和二十年三月二十六日、アメリカ軍との戦争で追い詰められた日本軍は、爆弾を抱えて、飛行機ごと敵艦に突入するという、まさに「必死」の作戦に出ました。「神風特別攻撃隊」と名付けられたこの隊に志願したのは二十歳前後の、未来ある若者たち。鹿児島県知覧からは、この特攻隊四百数

十基が飛び立ち、この作戦では、合計一、〇三六名もの尊い命が空に散ったのです…。

芳直さんは、特攻隊に飛び立つ直前の若者達の写真を見せてくださいました。どの写真を見ても、若者達はなぜか落ち着いた目をしていました。中には、無邪気な笑顔で笑っている写真もありました。ひょうきんな表情をしている写真もありました。とても、これから数時間後に決死のフライトをする人たちだとは思えませんでした。

芳直さんは、こう語られました。

「これから死ぬというのに彼らはなぜこんなにも屈託のない笑顔でいられるのでしょうか？」

彼らはきっと、自分達の子孫が、素晴らしい日本を作ってくれるに違いないと信じていたに違いありません。だからこそ、自分の命を懸けてでも、家族や、日本の将来を救いたい…と、空に散ることができたのだと思います。」

…もう、涙なしでは聴けませんでした。私の隣では、父も、何度も鼻をすすっていました。

それから数カ月後、父も含めてのお酒の席で、たまたま知

覧の話になりました。お酒が入って、普段よりも饒舌になっていた父は、こんなふうに言ったのです。

「知覧には、俺達の仲間がたくさん行った。近所の〇〇さんの息子も行った。だから、俺は死ぬ前に、一度知覧には行かなきゃいけないとずーっと思っていたんだ。俺達の仲間だからな……」

：私は、父がそんな風に思っていたなんてまったく知りませんでした。それに今まで「どこかに行きたい」なんて、一度も言った事がない父がそんな風に言うなんて、よっぽど行きたいに違いありません。これは、行くしかない！……と、この六月に、姉と父と三人で鹿児島県知覧旅行に行ってきた。

知覧特攻平和会館へと向かう道には、ものすごい数の石灯籠が並んでいました。亡くなった隊員の数、一、〇三六基の石灯籠を建立しようと計画されたようですが、すでにその数は超え、まだまだ増え続けているとのこと。

石灯籠には、兵士さんが彫ってあり、裏には、建立した方のお名前が彫ってありました。実際に特攻隊で亡くなった方のご遺族の方の名前もたくさん見かけました。：胸が詰まります。

知覧特攻平和会館には、「特攻隊」で亡くなった若者達の遺書や遺品、写真などが数多く展示されていました。突撃直前に撮った個人写真もあり、すべての写真には、名前と年齢、そして突撃した日を書いてありました。

もう、その写真を見ただけでも涙が溢れてきました。写真の中の兵士さんたちの、意思の強そうな、きれいな目……。下は十七歳から、二十代の若者達。特攻が行われたこの年、父は二十歳だったのですが、当時の父と同年の二十歳の若者の写真もたくさんありました。それに、ちやうどうちの学校の学生達と同じ年代です。うちの学生達の笑顔が次々に思い浮かびました。あんなに元気であんなにひたむきな若者達が……と考えると、胸がつぶれそうになりました。

彼らの遺品も展示されていました。洋服や帽子などのほかに、手作りの人形達がたくさんありました。隊員たちは、みんな人形を持っていたそうです。家族や近くの女生徒が、お守り代わりにと手作りして差し入れたものなのですね。

中には、女学生の服を着ているものもあれば、割烹着姿の女性の人形もありました。：きつとお母さんですね。自分の息子に、と手作りしたのでしょうか……？ どんな思いで、こ

の人形を作ったのかと思うと、本当に切なく思います。特攻隊員達は、たった一人で戦闘機に乗り込むのですが、このころのよりどころでもあったこの人形たちを、目につくところに下げたり、あるいは胸元にしまったりして、一緒に飛んで行ったそうです。

そして、おびただしい数の隊員たちの遺書：涙なしでは見ることができませんでした。ある隊員さんの遺書には、こんなことが書いてありました。

母上様、

今まで二十三年間、一点の曇りもなく育ててくださいまして、ありがとうございます。

私は今まで親孝行の一つもできませんでした。でも、今回、命を受け、晴れて特攻隊としてお国のために尽くすことができました。最初で最後の親孝行になります。

もしも、私が、成功しましたら、「せがれ、でかしたぞ」と言っただけでください。

母上様の息子に生まれて二十三年間、私は幸せでした。ありがとうございます。

…涙が止まりませんでした。隊員さんたちは、きっと、み

んなそんな気持ちだったのでしよう。「お国のため」と書いてありますが、その底には、「これが親孝行になる」と信じる気持ちがとても強かったように思えます。

ただひたすら、親を喜ばせたい一心で、自分が犠牲になっても、大切な人たちを救おうとしていたように思えます。どの遺書も、親や家族への感謝の気持ちであふれていました。謙虚な人柄が伝わってきました。

近くで見学していたグループが、「みんなしっかりしているなあ、今の若者とは全然違うなあ」…と、会話しているのが耳に入り、悲しくなりました。…もしかしたら、そういう部分もあるのかもしれませんが、私としては、今の若者たちも同じ純粋な気持ちを持っているように思えたからです。

もしも、自分の命が明日で最後…という、極限の状態になったら、きっと、今の若者たちも、やっぱり親への感謝の気持ちを書くに違いありません。

たくさんの遺書を読みましたが、「親孝行」というキーワードを書いている人がたくさんいました。これを読んだ親御さんたちは、どう思ったのでしょうか？…きっと、「日本を救おうとしてくれた息子は素晴らしい、誇りに思う。で

も、それでもやっぱり生きていてほしかった…名誉なんていないから、やっぱり生きていてほしかった…」と思ったに違いありません…。当時はそんなことを口に出すのも許されなかったのかもしれませんが…。

会館の見学を終え、最後に、父が言っていた言葉が印象的でした。

「特攻隊や戦争がいいとか悪いとかは別として、教育の力ってというのは、そういうものなんだ」

…心にズシンと来ました。確かにそうです。

「お国のために」と、自ら命を散らせていった若者達…

彼らの笑顔の写真をみるにつけ、「どうして？ どうして、笑顔なの？ つらくないの？ 嫌じゃないの？ 泣きたくなかったの？」…という思いがあったのですが、これも「教育の力」なんですね。とても恐ろしいものだと思いますが、逆に、希望が持てる部分でもあります。考え方を変えれば、「教育で世界は変えていける」ということにもつながるからです。教育に携わる者として、真剣に受け止めなければならぬ言葉です。

隊員たちの遺書や写真を見て、もちろんたくさん泣きまし

たが、ただ「かわいそう」「戦争は二度と起こしてはならない」という思いだけでなく、自分自身の「使命」や「役割」についても、深く考えさせられた、貴重な時間でした。

芳直さんは講演で、こうおっしゃっていました。

「特攻隊員のみなさんが命を懸けて救ってくださいました、日本の未来です。彼らは、自分達の子孫が、誇るべき日本を作ってくれることを信じて、空に散っていったのです。もしも、彼らが、今の日本を見たらどう思うでしょうか。彼らに誇れる日本なのでしょうか？」

…私達は、彼らに胸を張って見せることができるような日本、誇るべき日本を作っていかなければなりません。一人一人の力はわずかかもしれませんが、変えようとする人達の目指すところが一つならば、必ず世界は変わっていくにちがいありません。

「教育の力」のものすごさを思い知った今、私も教育に携わる者の一人として、隊員のみなさんが微笑んで見てくださるような日本にしていきたいと、心から思いました。